

## 校長室だより

令和4年度 第1号

## 校歌のはなし

4月5日に始業式、6日に入学式が行われ、令和4年度が始まりました。

コロナ禍に見舞われて以来、入学式・卒業式は感染防止対策のため時間短縮を第一に、式次第の項目を必要最小限に絞って執り行ってきました。そこで残念なのが、この2年間校歌は音源を流すのみで、歌唱ができていないことです。

本校の校歌は昭和27年制定。作詞：尾崎喜八、作曲：中田喜直という一流の詩人と作曲家により、芸術性の高い校歌が誕生しました。

尾崎喜八は戦後しばらく諏訪郡富士見町に住み、信州の自然を愛して多くの作品を生み出しました。作詞当時は60歳前後。本校へは二度ほど講演のために訪れていましたが、南豊科の駅まで見送った女生徒の清純な佇まいが、安曇野の風景とともに深く印象に残ったことが伝えられています。

中田喜直は後年「夏の思い出」や「ちいさい秋みつけた」など数多くの歌曲や童謡で知られますが、当時はまだ30歳前後の新進作曲家でした。父は「早春賦」の作曲者である中田章です。本校の音楽教師の伝で作曲が依頼されましたが、ほぼ同時期に、彼の代表作のひとつとなる「雪の降るまちを」も作曲されていたことが、本校の60年誌に記されています。冒頭はゆったりとした旋律で始まり牧歌的な印象を与えますが、後半には三連符を用いて躍動感のある曲調になり、後年の数々の作品を彷彿させます。

この校歌が誕生して今年で70年。

来年は学校創立100周年を迎える本校ですが、一日も早く、生徒が声を合わせて高らかに校歌を歌える日が来ることを、願わずにはられません。

## 【校歌を合唱版に編曲した際の、中田喜直自筆の楽譜】

